

令和元年度岩手県環境保健研究センター研究評価委員会の評価結果

1 会議の名称

令和元年度岩手県環境保健研究センター研究評価委員会

2 目的

試験研究機関の機能強化や効率的な業務運営の推進、また、効果的・効率的な試験研究の推進を図るため、「岩手県試験研究評価ガイドライン」及び「岩手県環境保健研究センター機関評価及び研究評価実施要領」に基づき、外部の専門家・有識者等で構成する研究評価委員会による外部評価結果を踏まえ、研究計画の変更・見直し等に活用するものです。

3 開催日時

令和元年10月7日（月曜日）13:30～15:40

4 開催場所

岩手県環境保健研究センター 研修室（盛岡市北飯岡一丁目11-16）

5 研究評価課題

	研究課題	評価区分	研究期間
1	麻痺性貝毒に関する機器分析法の研究	事前評価	R2
2	医薬品・生活関連物質の環境実態及び環境リスク解明に関する研究	事前評価	R2-4
3	重要な絶滅危惧植物を存続させるための技術開発に関する研究	中間評価	H29-R3
4	ツキノワグマの個体群動態と将来予測手法の開発ならびに人里への出没メカニズムの解明	中間評価	H29-R3

6 評価委員

役職	氏名	所属・職名
委員長	坂田 清美	岩手医科大学医学部 教授
委員	石川 奈緒	岩手大学工学部 准教授
	小浜 恵子	地方独立行政法人岩手県工業技術センター 理事兼地域産業技術統括部長
	渋谷 晃太郎	岩手県立大学総合政策学部 教授
	田端 雅進	国立研究開発法人森林研究・整備機構 森林総合研究所東北支所 産学官連携推進調整監
	村上 賢二	岩手大学農学部 教授

※ 五十音順、敬称略

評価方法

評価委員には事前に説明資料を送付し、評価委員会は研究課題の担当職員によるプレゼンテーションの後に質疑等を実施する形式で進め、後日委員から評価調書を御提出いただきました。

研究評価の結果は、説明資料と委員からの評価調書を取りまとめたもので、評価委員の総合評価基準と評価結果に対するセンターの対応方針の基準は下記のとおりとなっています。

記

1 研究評価の基準及び対応方針

評価委員には研究課題について、次のA～D評価基準により総合評価していただき、あわせて自由記載で記述評価をいただいております。

	A	B	C	D	E
【事前評価】 (新規課題に対して実施)	重要な課題であり、優先的に取り組む必要がある。	有用な課題であり、早期に取り組む必要がある。	解決すべき問題等があり、今後の検討を必要とする。	-	-
【中間評価】 (継続課題に対して実施)	順調に進行しており問題なし。	ほぼ順調であるが一部改善の余地がある。	研究手法等研究計画を大幅に見直す必要がある。	研究を中止すべきである。	-
【事後評価】 (終了課題に対して実施)	研究の成果は目標を十分達成した。	研究の成果はほぼ目標を達成した。	研究の成果は目標をかなり下回った。	研究の成果は目標を大幅に下回った。	研究成果がなかった

※ 令和元年度は、事後評価の対象となる研究課題はありませんでした。

研究課題に対する評価委員からの総合評価及び記述評価等のセンターの対応方針は、次のとおりです。

	I	II	III	IV	V
【事前評価】	研究計画のとおり実施	一部見直しの上実施	今後検討	実施しない	-
【中間評価】	研究計画のとおり実施	一部見直しの上実施	研究を一時中断する	研究を中止・廃止する	-
【事後評価】	研究の成果は目標を十分達成した。	研究の成果はほぼ目標を達成した。	研究の成果は目標をかなり下回った。	研究の成果は目標を大幅に下回った。	研究成果がなかった

※ 令和元年度は、事後評価の対象となる研究課題はありませんでした。

(評価資料 1)

研究課題	1 麻痺性貝毒に関する機器分析法の研究 (R2)
研究目的・背景	<ul style="list-style-type: none"> ・麻痺性貝毒の検査を、機器分析(LC-MS/MS)で行えるようにし、危機管理体制の強化を図る。 ・安全な食品(ホタテガイ)の供給を行うための毒化および減衰予測の指標を探索する。
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> ・定点で採取したホタテガイのモニタリングデータ解析 ・麻痺性貝毒の代謝物の定性および定量 ・毒化の環境要因の測定 ・得られた研究成果の発表
評価結果	<p>○総合評価 A (4人)・B (1人)・C (0人)</p> <p>○総合意見</p> <ul style="list-style-type: none"> ・食の安全を守るという点で重要な研究である。来年度の成果を期待するとともに、その次のステップとして貝の毒化の開始時期(流通を規制する必要が出る時期)の推定と、毒が減衰し流通可能になるまでの期間の推定に包括的に取り組むような研究として継続いただくことを希望する。 ・重要な課題と思われ、LCMS 分析値で評価するのは良いが、現場対策に活用する実用化を意識して進めてください。 ・重要性、緊急性、研究の発展可能性が認められ、優先的に取り組むべき課題と認める。 ・いつ食べられるようになるかを判断するために必要な研究であり、早期に実施する必要がある。 ・麻痺性貝毒に関する機器分析法の研究は緊急・重要性が高く、総合的な評価は A 評価と考える。
センターの対応方針	<p>1 研究計画のとおり実施 2 一部見直しの上実施</p> <p>3 今後再検討(計画再考) 4 実施しない(中止)</p> <p>貝の毒化メカニズムの解明とその減衰予測につながる優れた成果が得られており、今後、さらに研究を進め、麻痺性貝毒の迅速な分析法を確立することで、食の安全安心と危機管理体制を確保するとともに、本県の水産振興に寄与したい。</p> <p>なお、研究に当たっては、共同研究機関との密な連携を図っていききたい。</p>

(評価資料2)

<p>研 究 課 題</p>	<p>1 医薬品・生活関連物質の環境実態及び環境リスク解明に関する研究 (R2-R4)</p>
<p>研究目的・背景</p>	<p>高分解能 LC-MS/MS を用いて、医薬品・生活関連物質 (PPCPs) の環境実態を把握するとともに、国環研、地環研、国内外の大学等と共同で分析法の開発や環境リスクの解明を目指すもの。</p>
<p>研究内容</p>	<p><研究①>日韓共同研究：PPCPs の環境実態の把握、日本と韓国における現状の比較等を行う。(国立環境研究所、兵庫県環境研究センター、釜山大学との共同研究) <研究②>国環研、地方環境研究所とのⅡ型共同研究:一部のPPCPs (→環境中濃度がPNECを超過した事例のある物質) を対象とした環境実態調査、及び高分解能 LC-MS/MS による網羅分析法の開発を行う。 <研究③>岩手大学との共同研究：動物用医薬品の分解物等の環境影響を把握するために、高分解能 LC-MS/MS を用いて分解生成物の分析、構造の推定等を行う。</p>
<p>評価結果</p>	<p>○総合評価 A (3人)・B (2人)・C (0人) ○総合意見</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本研究は化学物質の環境への影響のみならず、薬剤耐性菌対策の一環とも捉えることができる。環境の健全性だけでなく県民の健康的な生活環境の保護という点からも重要な研究であることもアピールすべきと考える。 ・世界的な環境課題に対して高度分析手法を機関として有することは意義がある。機関としての目標管理を十分意識してください。 ・県民にとって重要な課題を含んでおり、推進すべき研究課題と認める。 ・日常使用する製品中の化学物質の環境実態を把握しようとするものであり、早期に実施するとともに継続して行う必要がある。また、さらに今後は毒性等についても研究を深める必要がある。 ・医薬品・生活関連物質の環境実態及び環境リスク解明に関する研究は、緊急・重要性が高く、総合的な評価はA評価と考える。
<p>センターの対応方針</p>	<p>1 研究計画のとおり実施 2 一部見直しの上実施 3 今後再検討 (計画再考) 4 実施しない (中止)</p> <p>県民の健康と環境を守るため必要な研究であると認識しており、これまで積み上げてきた環境実態調査、分析法開発等のスキル及び保有の高性能分析装置を活用し、未規制物質の実態を明らかにしていきたい。</p> <p>引き続き、国内外の研究機関と連携して研究を進めて行くとともに、研究成果を広くPRしていきたい。</p>

(評価資料3)

研究課題	3 重要な絶滅危惧植物を存続させるための技術開発に関する研究 (H29-R3)
研究目的・背景	「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）」の指定種から、繁殖技術が確立されていない種の保護や苗生産法の開発に取り組む。
研究内容	○対象種の現状調査：対象植物の調査（平成29～令和3年度） ○技術開発に関する研究：技術の開発試験（平成29～令和3年度） ○評価：実用試験・とりまとめ（令和元～令和3年度）
評価結果	○総合評価 A（4人）・B（1人）・C（0人）・D（0人） ○総合意見 ・非常に難しい状況の中での研究であるが、多角的に研究手法を検討して頂き、よりよい成果を期待する。 ・成果が見られており、今後も情報発信が望まれる ・概ね研究は順調に進行していると判断された。 ・研究を継続し、絶滅からの回避を期待する。シカの食害対策として早池峰地域の希少種について範囲を広げ取り組みを進めていただきたい。 ・重要な絶滅危惧植物を存続させるための技術開発に関する研究は、緊急・重要性が高く、総合的な評価はA評価と考える。
センターの対応方針	<p>1 研究計画のとおり実施 2 一部見直しの上実施 3 計画再考 4 中止</p> <p>絶滅の危機にある野生植物を守る重要な研究であると認識しており、高度な培養技術力が求められる中、着実に成果を収めている。 また、緊急性の高い研究として国等からの要請も強く、これまで蓄積してきた技術を活用して絶滅回避を実現させていきたい。 なお、研究に当たっては、国等との連携により研究者相互の情報共有も図りたい。</p>

(評価資料 4)

<p>研 究 課 題</p>	<p>4</p>	<p>ツキノワグマの個体群動態と将来予測手法の開発ならびに人里への出没メカニズムの解明 (H29-R3)</p>
<p>研究目的・背景</p>	<p>モデル地域でヘア・トラップ調査を実施して個体群動態と将来予測を行い、捕獲上限数の算定方法を開発する。また GPS テレメトリーによる行動圏の把握をもとに人里への出没メカニズムを解明する。</p>	
<p>研究内容</p>	<p>○モデル地域(岩手大学御明神演習林)でのヘア・トラップ調査の実施(平成29～令和3年度) ○動態モデルの構築(広域下とモデル地域の密度差を考慮)(平成30～令和2年度) ○堅果類の結実豊凶調査の結果から自然増加率の推定(平成30～令和2年度) ○将来予測による捕獲上限数の算出方法の検討(令和3年度) ○GPS テレメトリーによる行動圏の把握(平成29～令和2年度) ○行動圏内の植生調査(平成29～令和2年度)</p>	
<p>評価結果</p>	<p>○総合評価 A (4人)・B (1人)・C (0人)・D (0人) ○総合意見</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 研究は着実に進んでおり、将来予測に向けた進展も期待できる。 ・ 着実に進められているが、将来予測や出没可能性予測につながるよう研究を加速してほしい。 ・ 研究は全体として順調に推移しており特に問題は認められない。 ・ 早期に精度の高い個体数推定を行い、絶滅を回避しつつ事故等を減少させるための個体数調整が行えるようにしていただきたい。 ・ ツキノワグマの個体群動態と将来予測手法の開発ならびに人里への出没メカニズムの解明研究は、緊急・重要性が高く、総合的な評価は A 評価と考える。 	
<p>センターの対応方針</p>	<p>1 研究計画のとおり実施 2 一部見直しの上実施 3 計画再考 4 中止</p> <p>岩手県におけるツキノワグマによる人身被害や農林被害を低減するため、捕獲上限設定に繋がる精度の高い個体数推定の研究に努め、保護管理計画の策定等に貢献していくとともに、大量出没メカニズムの解明をさらに進めていきたい。 なお、研究に当たっては、他機関との密な連携を図っていきたい。</p>	